



文化に気をつけろ! : ネオリベ社会で文化を考える5つの方法

小笠原, 博毅

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 30:101-114

(Issue Date)

2008-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81000854>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000854>



文化に気をつけろ！：ネオリベ社会で文化を考える5つの方法¹

小笠原 博毅（神戸大学）

序

この文章は「文化に気をつけろ！」と警句を発しているのだが、「気をつけ」なければいけないのは誰なのか、なぜ文化が警告の対象になるのか、この点が重要である。次に、5つの方法と銘打ってはいるが、これは別段「気をつける」べき文化への処方箋を配布するわけではなく、現代文化をよりよく理解するためにはどのような視座が有効であると考えられるかを提案するにすぎない。このような視座に立てばよりよい文化が創れますよだとか、この問題はこれこれこういう立場に立てば解決できますよ、などというお手軽な対症療法を授けることが目的ではない。現代の日本社会に暮らす私たちは、特定の文化的潮流にどのようにいやおうなく組み込まれ、もしくは接触せざるをえない状況に置かれているのか。その立場性をまず理解するための視座を試論的に作り上げるための準備をすることが本論の目的である。

まず、ネオリベ、つまりネオリベラリズムという言葉について、ある程度の限定的な意味を教科書的に確定しておこう。レッセ・フェール、すなわち国家や法、制度上の制約なしの需要と供給からなる市場関係と、そこでのエージェントとしての自立した個人を基本単位として社会構造を捉える古典的リベラリズムとは異なり、国家が法によって統治できる範囲で市場原理主義を原動力として社会を構成していこうとする政治的・倫理的営みを、ここではネオリベラリズムと呼んでおく。近代社会を通じて国家と市場の関係は常に変化してきた。小さい政府、夜警国家、競争原理、規制緩和、自由化というリベラリズムを特徴づけるキーワード群は、高度資本主義の進展とともに福祉国家という経済と政治との相補的なシステムによって後塵を拝してきたけれど、グローバル化す

る経済構造の力によって、国家の機能はしだいに最低限の〇〇（賃金でも生活でも代入可能だ）を保障するという役割に特化された。この手の国家の介入を触媒にして、資本主義は次なるキーワードを人口に膾炙させていく。自己責任とか自立というマジックワードだ。こういわれると二の句が告げなくなる。少なくとも二の句を告げなくさせるように機能するこれらの魔法の言葉群は、国家が最低限の保障をして、少なくとも経済的な生存条件を満たしているのだ、という前提がなければ意味をなさない。

経済的には一定の豊かさが達成されている、それも最大多数の範囲で、という量化された人口統計を証拠として提示されるとき、焦点が文化にシフトされる。このような単純思考の繰り返しが、現代日本の文化状況に大きな影響を与えている。少なくともこの国で文化を考えると、こうした思考パターンを、いくら短絡的であるとはしても、無視することはできないだろう。これから提示する現代文化を考える5つの方法は、文化とそれ以外の領域との階層関係を自明とはしない。もちろん、文化という領域自体も自明視はしない。文化が自律的領域であるとしたら、どのような条件の下にそう言うことができるのか、文化をそのようなものとして決定=表象する力は何か。常に不確定な実践の集積として文化を捉え返すこと自体が、重要なタスクなのである。

1. 80年代

現代文化を考える一つ目の方法は「80年代」である。それも初頭。「バブル」をキーワードとした、大衆文化における80年代論がいくつかが矢継ぎ早に出版されているが、バブル崩壊明らかな時期に大学入学を果たした筆者にとっては、ノスタルジーを動機にするにはまだ生々しい記憶の対象だし、軽薄短小を足蹴にするような否定的な色彩だけで済ますにも、あまりにも皮膚感覚で想起できる時代である。それに何よりも80年代は、「なんだかやばい」という気分を捨て去れない時代だった。

そこでまずは単純に、80年代を現代との比較の対象として考えてみてもいいだろう。「やばさ」とは、ナショナリズムが平気で語られるようになったこと

にも起因する。その一端として大平正芳内閣が繰り広げた「文化の時代」というキャンペーンに着目してみよう。当時国立民族学博物館長であった梅棹忠夫は、「文化の時代」と題されたエッセイを、旧文部省官報であった『文部時報』1980年6月号に巻頭論として寄稿し、こう述べている。

「何かが動かねばならないような時代になってきている。・・・いよいよ文化の出番になってきた。・・・その（戦後日本の）経済的成功が“文化の時代”への道を開いた。・・・国家はこの欲求に応えて文化は個人の問題としてそしらぬ顔をしてはいけない」。

首相の私的諮問機関であった政策研究会が、明らかな政策プロジェクトとして「文化の時代」を捉えているという紹介も兼ねたこの小論は、一つの国家目標として文化が重要視されていることに着目し、経済的繁栄を築き上げるために犠牲にされてきた文化を、明確な達成目標として掲げたものだ。国家の要請としての「文化」。

経済のゆきづまりからの「文化」への転進ではなく、経済的豊かさから「文化」的豊かさの追求へという論理付けは、80年代を彩る数々の「日本文化論」の隆盛に通底するものであり、同時に「経済国家からの転換」と「戦後政治の総決算」を掲げた中曽根内閣の文化政策にも一貫していた。プロフェッショナルかアマチュアかに限らず、「日本文化論」が当時のアカデミズムの中だけから要請されたものだと単純に考えられないということは、再び強調しておいてもいいだろう。

1985年夏に開かれた自民党軽井沢セミナーにおいて、中曽根康弘は、「平和で豊かな時代になったところでもう一回日本のアイデンティティーというものを作るときにきたと思う。だから国際日本文化研究センターを作ろうと言っている」と発言している。1979年の元号法制化から、大平内閣時代に「愛国心の欠如」を理由に一部の公民教科書を排除しようとした「教科書偏向キャンペーン」を経て、この85年2月、中曽根は現職の首相として始めて「建国記念を祝う国民式典」に公式参加し、8月にはやはり現職の首相として初めて、靖国神社に公式参拝する。9月には、卒業・入学式での日の丸・君が代斉唱の徹底が

文部省により通達される。このような一連の動きと、日の丸・君が代法制化以降、安倍晋三が首相時代に口にした「美しい国」にいたる文化的領域への政策的関与は、ただ単に類似という点からパラレルに考えられるだけではなく、30年近い年月を通じて、社会経済の浮き沈みを何とかやり過ぎつつじっくりと準備されてきた、国家による文化の再領有化として考えることもできるだろう。また少し視点をずらして、この80年代のような事態によって、「文化」とはそもそもその始めから公的な領域とされてきた国家との折衝にさらされてきたのだと考えることもできるはずだ。こう考えれば、「経済国家からの脱却」などと言ってはみても、80年代文化を特徴付ける現象の一つが、戦後に技術立国政策の結晶とでも言える電気機器によって生み出されたということもよりよく理解できるはずだ。

2. メイド・イン・ジャパン

「技術立国政策の結晶」としてのソニー・ウォークマン。二つ目の方法は、この機械装置が象徴的に意味する「メイド・イン・ジャパン (Made in Japan)」である。ウォークマンは1979年に発売開始された。iPodだって音楽ケータイだって、そもそもウォークマンという発想がなければ生まれることのなかった代物だ。歩きながら音楽を聴くことができるという身体技法を一つのスタンダードにまで昇華せしめた現象は、技術革新である以上に、日本を発信地とした新しい大衆文化のスタイルが定着するきっかけとなった。ちょうどそのころ、分割民営化をそう遠くない先に経験するであろう国鉄が「エキゾチック・ジャパン」なるキャンペーンを打ち出している。日本の再発見。知っていると思っていたがまだまだ知らない、日本。第二次オイルショックで、右肩上がりだった日本人の海外旅行熱がいったん落ち着いたという事情もあったのだろう。80年代後半の円高を反映した第三次海外旅行ブームが到来するまでの数年間は、国内旅行への回帰が見られることになるのだが、バブル前夜のこのキャンペーンを耳で印象付けたのが、郷ひろみの歌う「2億4千万の瞳」だった。

作詞・作曲を手がけたのは、元ブルーコメッツの井上大輔（本名井上忠夫）。

彼はもっぱら歌謡曲の提供者であるだけでなく、1981年に公開された『機動戦士ガンダム』の映画版『哀戦士』で自ら主題歌を歌っている。まだジャパニメーションなど存在していないし、そんな呼称すらもない時代。しかし、熱烈なファンがセル画を集め、登場キャラクターそれぞれの「個人史」にまで注目して、物語の大筋ではなく個々のキャラに沿ったミクロな物語を理解することにより多くのエネルギーを費やすのは、『宇宙戦艦ヤマト』ではなく、『ガンダム』なのだ。今に連なるアニメ・フリークを中核としたオタク文化の萌芽がここにあるだろう。

宇宙空間でのモビル・スーツ同士の戦いという技術革新の物語を軸にしながらも、「ニュー・タイプ」という新たな人類の類型を主要キャラクターに置き、肝心な場面では（アムロにしてもシャーにしてもララーにしても）科学技術を軽々と超える超人的な心的波動が共鳴しあって、オカルト的環境をある種の必然として、見るものに理解させている。もしかしたら、これがポストモダニズムだったのかもしれない。単に未来派的な技術のユートピアを想像させるのではなく、「今の」人類にはないかもしれないけれど、また覚醒されきってはいない人間の内在的なサイキック・パワーでもって問題を解決する発想。逆説的だが、人間回帰の思想が、ここにはある。当然、「人間」という範疇が示す意味は異なっているのだが。

大友克洋の『アキラ』から始まる（とされる）サイバー・ジャパニメーションにしても、日常的な生活環境をかゆいところに手が届く的手法で変容させていく技術革新にしても、「メイド・イン・ジャパン」はその後30年近いタイム・スパンで世界の大衆文化を牽引していくことになる。しかし、双方の目指すべき場所、オタクの聖地とされつつもなおかついまだに昔からのメカ・マニアが集う秋葉原では、まったく別の「メイド」文化が花開いているのは皮肉でもなんでもない。メイド喫茶、メイドカフェ、メイドヘアサロン、メイド〇×。。。セクシュアリティをそぎ落とされているというセクシュアリティには、「癒し」と、おそらく一部には「いやらしい」が見事に混在し、えもいわれぬ快樂の時間と空間が提供されているのだろう。技術とアニメ同様に、この種の「アキバ

系メイド・イン・ジャパン」もまた国境を越えて輸出される。パリで、ロンドンで、ベルリンで、「メイド・イン・ジャパン」。おそらくこれは、「美しい国」を構成する要素としては考えられていないに違いない。わざとらしい政治の詭弁術がするよりよっぽど早く、周到に、「ジャパン」が世界に受け入れられている、一つの証拠だ。

『哀戦士』を歌った井上大輔は、20世紀最後の年である2000年5月に自殺した。自ら患っていた網膜はく離と、難病に苦しむ妻の看病疲れが原因だと言われている。それは小淵恵三の後を受けて首相の座についたばかりの森善朗が、「日本は神国」だと発言し、17歳の少年が愛知で主婦を殺し、また同じく17歳の少年が西鉄の高速バスをバスジャックしたのと、ほぼ同じころの出来事だった。半年後、教育改革国民会議は、道德教育の重視を盛り込んだ答申を報告し、就学者の「人間性」の育成を重要課題として、後の教育基本法改正に至る道のりを準備したが、日本社会の介護の実態がどのように「人間性」を削り取られるような経験なのか、誰もきちんと検証しようとはしていなかった。

3. 哀／愛

三つ目の方法は、「あい」だ。中曽根内閣時代に「愛国心」という言葉がたいしたためらいを伴わずに政治家の口から放たれるようになって以来、「国を愛する心」は教育政策の細部にわたって強調されるようになる。『ガンダム』の哀戦士たちは、結局運命に翻弄され、ニュー・タイプのポテンシャルを自在に操りきることもかなわず、アムロにいたっては恋するマチルダ中尉の命さえ救えなかった。それゆえに「哀」なわけだが、安倍前首相が戦後政治の集大成として憲法改正に結実させようとしていた「国を愛すること」の「愛」は、いったい誰にとっての何のための「愛」なのだろうか？ 明治近代以降、ナショナリズムによって「哀」を強いられてきた経験を、安倍の言う「愛」はどこまで考慮に入れられているのだろうか？

おそらく、今現在巷にはびこる「愛」は、このような「哀」の経験を含んではいない。「癒し」という名の「愛」ならばアキバで手に入るのだし、お金さ

えあればフットマッサージから有機野菜のみの体にいい食事まで何でも手に入るのだから。だから、お金のない人のことは、あまり話題にすらならない。格差格差と騒いではみても、その格差は何と何の、誰と誰の格差なのだろうか？日本人の市民の間の格差。それは大きな問題。そして現実である。ところが、長浜で自分の子供と同じ年の幼稚園児を殺害した中国籍の母親とデヴィ夫人との格差は誰も問題にしない。ということは、問題ではないのである、現在の日本では。「社会問題」というとき、この「社会」を構成している原理的なメカニズムは何か、という問いを抜きにして問題を語ることは、スピード・メーターを設置して初めて速度超過という犯罪を作り上げるのと同じことだ。火のないところに煙は立たない。「問題」視する視座のないところに、問題はありえない。

国への「愛」が足りないことが問題だ、と言われる。現代日本のナショナリズムの動向は、その言葉の意味も含めてたくさんの人たちが論じているから、ここでは取り上げない。議論したい「愛」は、誰が何に向ける愛か。日の丸と君が代も、「強制ではない」という。「日本人だけに適用される約束」だという。でも、日本人「だけ」などという空間が、今のこの社会で原則であり続けることなんて、あるのだろうか。そもそも何をもって「愛」の表現とするかは誰にも決められないはずだ。サディズムとマゾヒズムだって支配的な性規範からすれば「倒錯」かもしれないが、きちんとした「愛」の表現スタイルであることだってある。では、日の丸を鞭打ち、縛り付け、蠟燭をたらしたらどうなるか？奇妙な高揚感を覚える人はいるかもしれないが、「美しい国」の「愛」だとは判断されないだろう。

「愛」は限定されている。それを持てる人も、向けられるものも。それは日の丸を美しいと思い、君が代に胸を熱くし、故郷の山河（どこにそんなものが？）を落ち込んだときの慰めとし、両親祖父母のそろう家族を明日への活力の源としなければならない「愛」なのである。ここに列挙したような風景を想起できる人たちの共同性の掛け金として、まさにここで列挙したようなことを想起できる美的判断基準が動員される。これを政治の美学化と呼ぶのは、あま

りにも当たり前すぎて陳腐だ。小泉前首相はサミットに「ファースト・レディ」を伴って行けなかったのだから。安倍の「愛」は、先輩の喉下に刃を突きつけているわけだ。

ナショナリズムの小道具に「哀」を読み込み、歴史の忘却・捏造と排除の論理を理由に「愛国心」を批判するのは、正当な判断であり、最も重要な取り組みではある。しかし、均整の取れたモダン・デザインである日の丸を「美しい」と思う人がいたとしても、それが必然的に日本という国民国家を「美しい」と思うとは限らない。ホイッスル前のサッカー選手が君が代を聞いて目を潤ませていたとしても、それは試合前の高揚感からであって、日本人であることの誇りからとは限らない（試合開始前のラガーメンたちを見よ）。故郷の山河はとっくにダムで、幻を追い求めているだけかもしれないし、家族を牢獄と置き換えてもなんら苦痛に感じない国民もいるだろう。このように、いまや、むしろこの社会におけるお決まりの美学を断絶する契機があふれていると考えることはできないだろうか。小道具がシンボルと必然的に一致することはありえないのに、あたかもイコニック的記号としての自然な一致というシナリオを前提としないと、「愛国心」に関する議論さえできないようになってはいないか？

かつては多くの家の居間に飾ってあった、天皇家の人間が大勢でニコニコしながら家族を演じている写真。そんな家族像が想像もできないし、知識としてもありえない人々。日本的な山紫水明が美しいという範疇に入りきれない人々。今や「私たち」はそうした人々である。家族や風景自体には何の価値もない。そこに読みこまれる経験とその経験に付与される意味が「私たち」を遡及的に特定の共同体の一員であるかのように倫理付けるのであり、いまや「私たち」はそうした意味の多義性の只中にある。「哀」なき「愛」の強調は、多義性に対する不安に満ちた対処療法であることを、自ら告白しているようなものなのだ。

4. 移動／異同

愛のあり方は多様であり多義的であるというとき、その多性がもっとも顕著

に表象されるのは、移動してきたものたちとの異同を認識し、他者を異なるものとし、同時に「私たち」という同性を再確認するときではないだろうか。移動と異同がもつれあって紡ぎだす政治は、ごく最近のことでも、はるか昔の話でも全くない。日本列島はたくさんの人々が移動の果てに住まうようになる場所であり、また別の場所へ行くために移動を開始する場所でもあり続けてきた。20世紀になってからだけのことを考えても、台湾、中国大陸、朝鮮半島から強制的か自発的かに関わらず多くの「民」が移動してきた。同時に、ハワイへ、ブラジルへ、アメリカ大陸へと、多くの「民」が移動していった。この掛詞、「移動／異同」が、文化を考える第4番目の方法である。

移動する民、つまり「移民」。この「移民」が特定社会における人種差別の原因とされるのは、「移民」を受け入れる所謂ホスト社会の側から発せられる論理としては、それほど珍しいことではない。珍しいことではないが、ここには常にある種の論理のすり替えがあることに注意しなくてはならない。人種差別の根本的な原因は、人種差別をするホスト社会の人間たちではなく、移動してきた人々のホスト社会の文化、言葉、生活慣習との違いが際立つことが悪いのだというふうな。この時点で、差別の対象になる人種的差異は、肌の色ではなく「文化」となる。これが1970年代後半にイギリスの人種関係に関する研究で注目されるようになった「新しい人種差別」という考え方である。

石原慎太郎東京都知事の一連の人種差別発言は、数十年遅れとはいえ、その最も先鋭的な表象である。増加する「移民」人口と、それに呼応して言われるようになった「外国人」による犯罪率の増加というまことしやかな因果関係に言及した、「三国人」発言²。オリンピック誘致合戦で、福岡への支持を表明した姜尚中に対する「生意気な外国人」発言。「日本よ、内なる防衛を」と題された投稿の中で石原知事は、「こうした民族的DNAを表示するような犯罪が蔓延することでやがて日本社会全体の資質が変えられていく恐れが無しとはしまい」と言う³。石原発言は、旧植民地からの移民を蔑む含意のある言葉としてだけ取りざたされがちだが、実は「三国人」の次に「外国人」という言葉が続いている。現代日本の「移民」は、もちろん旧植民地からの人口だけではな

い。東南アジア諸国、南米とくにブラジルやペルー、ロシア、アフリカ諸国など、巨大産業の下請けや危険労働に従事するための不法／合法「移民」は、世界中からやってきて日本に住まう。石原の視野はポストコロニアル状況を承認できていないのではなく、移動を異同にハイジャックさせ、「いどう」の二重の意味を効果的に排斥と差別へと結び付けている、きわめて戦略的な発言だと言える。

このような石原の姿勢を論うことで注目すべき問題は、民族やDNAという人種に分節化可能な語彙が、文化ナショナリズムによって動員される事態が起きているということである。文化の「異同」が恐怖、不安、疑心暗鬼を生み出すものであると、公的言説の水準でいとも簡単に言われてしまう理由の一つは、おそらく「人種」の定義の不確かさにある。たとえば、さまざまな移民コミュニティを支援する中で、そのコミュニティが直面する人種差別に抵抗して運動を実践する場合、すぐに陥る困難は、いったい何をターゲットとするのかということだ。平等な雇用の促進か、住宅事情の改善か、社会・政治参加（市民権）の保障か、生活権の確保なのか。民族や人種の差異を直接どうこうする、たとえば「承認」という抽象的な言い方に限ってしまわないかぎり、社会運動の実際的目的である一定の到達点を具体的に明示することが極めて難しいのである。「承認」とされるとはどういうことか？ こう問いかけたとたん、具体的な社会的、経済的、政治的場面での状況待遇機会の改善というそれぞれの場面を想定せざるをえないのである。

したがって、「移動」の結果「異同」があるのか、「異同」があるから「移動」の必要性があるのか誰にもはっきりとは分からないまま動員される人種の語彙群は、人種関係の閉ざされた領域でだけではなく、他の社会的歴史的関係の隠喩として考察されなければならないだろう。使い捨て可能な人的資源として生産関係に組み込まれている人種、不可逆的な歴史の産物としてポスト植民地関係に組み込まれている人種、性的搾取の政治に最も顕著に現れるジェンダー関係に組み込まれている人種。日本社会にとって一旦は必要な価値として承認されたものの、その同じ人々を人種の違いを理由に使い捨てる論理が、今ほど明

確化されつつある時代はないだろう。制度としての帝国主義も植民地主義も「終わった」ことになっている。しかし、だからこそ、単独の政治争点ではなく、時にはさまざまな政治関係の中枢にあり、また時にはさまざまな政治関係を媒介して一つの争点を形作るような、「浮遊するシニフィアン」(ホール)としての人種を考えなくてはならない⁴。「移民」の増減が人種差別の増減に直接結びついているなどという理由づけは、「異」を排除し「移動」のルートを閉ざし廃止するのではなく、制限することで「同」を作り上げるためのイクスキューズを、統治する側に与える発想でしかないのだから。

5. W.E.B.デュボイス

石原の「三国人、外国人」発言が端的に示すように、現代日本の人種差別の体系は、肌の黄色いアジア人だけではなく、もっと多種多様な差異によって形成されている。日本社会もまた世界の人種の地政学の一部を形成しているのである。しかしこれもまた、最近の目新しい出来事として片付けてはいけない。日本や日本人もまた、近代世界の「カラー・ライン」によって否応なく影響されることを、W.E.B.デュボイスは70年前に明言していた。5つ目の方法は、まさにデュボイスその人である。しかし、人種差別批判のチャンピオンとしての彼とは若干異なる文脈で。

「カラー・ライン」、すなわち白人と有色人種との対立の克服こそが20世紀最大の政治的課題であると宣言したデュボイスは、一つの致命的な過ちを犯してしまった。ビル・V・ミューレンとキャスリン・ワトスンが編んだデュボイスのアジアに関する発言・論考集である *W. E. B. Du Bois on Asia: Crossing the World Color Line*⁵ やマニング・マラブルの最近の研究 *W. E. B. Du Bois: Black Radical Democrat*⁶ を参照すれば、それは「カラー・ライン」の政治における日本の位置性を誤って評価したということだ。1936年から37年にかけてインド、中国などのアジア歴訪の一環として日本を訪れたデュボイスは、白人西欧への効果的な対抗勢力として大東亜共栄圏を礼賛してしまった。もちろん、単純な称揚ではなかった。日本と中国は争いを止め、もっと大きな世界地図と世界史

を見据えたうえで、西欧列強の帝国主義、植民地主義への抵抗勢力として有色人種の模範となるべきであるという、一見戦略的な装いで東アジアの植民地戦争を終焉させ、世界の白人支配を批判すべしという願意に満ちたものであったことは確かである。

しかし、それは過ちであった。第一に、白人西欧とは違う植民地主義であるとした点で。第二に、日本の帝国主義的侵略は西欧列強の猿真似であるとした点で。猿真似なのに違う？これはどういうことか。デュボイスが日本に強く言及し始めたのは、日露戦争後の「黄禍論」に異議を唱えたことに始まる。日本は近代にとっての禍などではなく、西欧帝国主義へ対抗する希望の前衛であり、後発国を近代化するためのモデルとなりうる国であると。日本が満州に侵略すると、武力行使を止めるよう日本に呼びかけると同時に、同時に中国は日本と「協力」しなければならないと提言する。なぜならば、彼が満州を訪れた際に目にした学校の授業では、中国人児童も日本人児童と対等な教育を受けていたからだという。ここにデュボイスは、西欧の植民地主義とは異なる植民地のあり方を見る。それはアジアにはある種の同質性があるという前提に基づいたものだった。アジアとしての精神的、道徳的、倫理的均質性があるのに、なぜ日本は西欧のように振舞おうとするのか？この疑問がデュボイスを苛み続ける。

前述のミューレンのようなアメリカのデュボイス研究者は、このような彼のスタンスを「アフロ・オリエンタリズム」として批判するが、ここではその是非は論じない。それよりも重要なことは、デュボイスの問題含みの日本近代へのまなざしを、重大な警句として現代化することである。デュボイスは日本を世界の「カラー・ライン」の政治の中に位置づけた。東アジアの同質性というファンタジーに裏付けられたままではあったが、有色人種と白人との複雑な配置の中に日本の位置を見つけ出したのだ。旧植民地からの「移民」だけに目を奪われがちな現代日本の人種差別の様相に対して、デュボイスはリフレッシュされた視点を再び提供するだろう。しかし、彼がアジアに抱いていたその同質性のファンタジーはそのまま日本の同質性へのファンタジーに繋がることも忘

れてはならない。日本の周縁領域である沖縄、九州、北海道は、本州の現代史とは異なる民族的・人種的混交性を経験しているし、本州でも日本海側か太平洋側かでそれは異なる。都市と農村、工業地域と山間部、鉱山労働や港湾労働の現場、アメリカ軍基地のあるところとないところ。人種と民族の経験を日本という括りで語ることにはそもそもの困難がある。本来バラバラで統一された規則性などない他者との遭遇なのに、日本という共通の磁場を想定してしまうことによって日本人という「同」を生み出すことになってしまう。デュボイスがはまってしまったアジアや日本の同質性の罨こそ、その「同」の受け皿となる「文化」なのだ。日本人というカテゴリーが人種化された文化の保持者として倫理的なコミュニティとなる時、その「なり方」がどんなに—デュボイスが日本と大東亜共栄圏に対してしたように—政治的に正しそうであっても、そこには排除の論理が働いてしまう。

だから、文化には気をつけなくてはならない。気をつけなくてはならないのだけれど、ジャパニメーションや現代アートなどの「日本発」が世界市場を席卷し、その後にもまた日本に戻って再評価されるような一連の流れができつつあることを念頭に置けば、日本の現代文化は常に外部との折衝の効果として定位されるような多孔性を持つものだと言っても言い過ぎではないだろう。しかしそれはまだ、ましなほう。ではたとえば、香港で売られているアダルトビデオのほとんどが日本で制作されたものだということを考えれば、「真正な」日本文化の発信を試みる文化エリートの意に反して、「真正」ではないものがどんどん発信されていることがわかっていくというものだ。実はこのような、せき止め切れない、「真正」ではない、目を覆いたくなるようなサブ・カルチャーこそ、どこよりも何よりも早く流通する。文化ナショナリストによる人種の語彙の動員は、このような潮流への対症療法的危機感の現れである。少なくともそのような特徴が全くないとは、言い切れないのではないだろうか。

注

- 1 本稿は2006年11月10日に行われた神戸大学国際文化学会において報告した内容

を若干加筆・修正したものである。

2 2000年4月9日、自衛隊練馬駐屯地での陸上自衛隊第1師団創隊記念式典において、石原は「今日（こんにち）の東京を見ますと、不法入国した多くの三国人・外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している。もはや東京の犯罪の形は過去と違ってきた。こういう状況で、すごく大きな災害が起きた時には大きな騒擾事件すらですね、想定される、そういう現状であります」と発言した。

3 産経新聞2001年5月8日

4 Hall, S., *Race: The Floating Signifier*, Media Education Foundation, 1996

5 University Press of Mississippi, 2005

6 Paradigm Publishers, 2005